

『雲隠六帖』の「冷泉院」

——『源氏物語』との繋がり——

咲 さき
本 もと
英 はな
恵 え

はじめに

室町時代に成立したといわれる王朝物語のなかに、『雲隠六帖』と呼ばれる作品がある。その『源氏物語』を補完する短い物語は、「雲隠」「巢守」「桜人」「法の師」「雲雀子」「八橋」の全六帖から成り、そこでは光源氏や薫の即身成仏、匂宮の即位などが語られる。そうした『源氏物語』に乖離的な内容や、仏教用語の乱用、梗概書的な構成は従来批判の対象となり、この作品の内容が評価されることはほとんどなかった。(注1)

現在、七冊の写本（別本系）と、版本（流布本系）の二系統が確認されているが、それを整理された小川陽子氏は、あらたな写本（堀田文庫本）を紹介し、二種類の雲隠六帖の成立過程や物語の位置づけを詳細に考証した。(注2) 小川氏によれば、伝本は別本系がより早い成立であるらしく、なかでも堀田文庫がもつとも欠損の少ない本文だという。

氏は、写本・流布本は共通祖形からともに派生したものであるといい、現時点でその「祖形」にもっとも近いとされる堀田文庫本をさまざまな斬り口から考察された。そのなかで、六帖が書かれた理由は「『源氏』そのものへの並々ならぬ関心と同時に、天台六十巻への強い執着があつてのこと」に他ならないこと、作者は「後日譚の端々を連ねるのみで『源氏』の文章に近づける気はない」こと、この六帖は「中世に多く読まれた梗概書を補おうとして書かれたもので」あろうということなどを

指摘し、「源氏」からダイレクトに生まれた、同次元に置くべき作品としてではなく、中世における傍流の「源氏」享受世界から生まれた一つの享受形態として「雲隠六帖」を位置づけ評価したが、それはやはり、従来の批判的評価とずれるものではないだろう。

だが、そもそも、「雲隠六帖」の登場人物はどのような基準で選ばれ、出家・往生・成仏のみちを与えられたのだろうか。六帖作者が、その作品にのこした意図や想いが、従来の研究で十分に省みられてきたとは言えないように思う。そこで本稿では、六帖のうち、とくに冷泉院のその後を物語る第二帖「巢守」に焦点をあてる。その「巢守」は、「源氏物語」の特別な主人公でもなく、源氏能などのようないわゆる「源氏物語」享受作品のなかでも主人公性を獲得しているとは言えない冷泉院を取り上げている点で特異だ。六帖作者が冷泉院をテーマとしたのはなぜだったのだろうか。作中使用される語や「源氏物語」との相違に着目しながら、この物語が描かれたことの意味を考察したい（なお、以降「雲隠六帖」中の登場人物を指す時は、「人物名」で表すことにする）。

1. 冷泉院の往生

別本系『雲隠六帖』の第二帖「巢守」(以下、「六帖」巢守)と呼ぶことにする)は、「光源氏」の即身成仏を記した六帖「雲隠」の次帖に位置し、その物語時間は「源氏物語」夢浮橋巻のあとに設定されている。このとき「冷泉院」はおよそ五十四、五歳。出家を考えているが、妻や子(女一の宮)、「玉鬘大君腹の若宮姫宮」たちが現世のほだしとなつて俗世に居残りつづけていた。

その頃は、ただ行く末なき御事を思ひ嘆き給ふのみにてぞ明かし暮らさせ給ひける。とりわけ冷泉院の御事は晴るる世なく、「いかでおはしません所へ行わざもがな」と御心のおこたりなく佛を念じたてまつり給ひて、さらば世をや背かるなどと思し召しけれども、女一の宮もいまだ御後見などもなく、御息所の御腹の姫宮、若宮など、らうたきにておはする

を見給ひても、思し召したつ事のすぐいと難きなれば、

ものごとの見捨て難きに絆されて我ぞ巢守になりぬべらなる

かく思ふもいと深き心ぞかし。

(一一丁ウ)

その「冷泉院」が、「いかでおはしません所へ行わざもがな」と、「光源氏」のいるあの世へ傾倒していくさまから物語は語られ始め、「院」は仏道への志をさまざまに仏教用語を使って語つていく。(注)

「(a) げにや、人の身に三身とぞあるなり。それを見あらはさぬかぎりは心もぬるく、世も恥かしきといふなるものを」とあさましくおぼしめしつけて、「此世を厭ひ離れしがな」と御心ひとつにのみ明かし暮らし給ひて、やうやう「(b) 本来の面目といふは、ただ我が身の上の三徳究竟の体なり。法花にとりては、これを十如是ともいふなり。如是相と云ふは、我がかたちなり。これを應身の如来ともけたいともいふなり。如是性といふは我が心の性をいふなり。これを報身の如来とも又、くうりんともいふなり。如是体と云ふは我が身の体なり。法身の如来とも、又、中道ともいふなり。これをもととしてぞ、十如是ともいふなる。此の法報應の三身を我が身の上と知らざるを、迷ひとも凡夫とも衆生ともいふなり。ことを知る時、如来とも上人とも悟りとも云なり。これをよく悟りぬれば、三身如来とも三徳の面目ともいひ、悪しく見れば三毒の炎とも三熱の常相とも三業ともいふなり。ただこれ一念の生する所なり。まづ、ただ(c) 本来の面目、本覺の如来と二つなきを言ふものなり。(d) 我、上なき位にて、犯せる咎あれども、心にはおぼへざれども、万の事程々にしたがふ事なれば、民たるもの生けるかぎり作りたるといわんも、まろがやうの者、ただ一ことの犯しといはんも同じ事ぞかし。されば聖の御門と聞こえしも、一、二の違ひ目によりてこそ地獄の苦をば受けたまひしなれ」と、やうやうこの世逃れたまはん御心遣ひ深く染みけるは、若宮姫宮などもなべて御心に入たる気配もなく、睦まじと思ひたてまつり給ひし女御、后も何とも思ひ給はず、「(e) 我はそも、いづくより来れるものぞ」などと、あしたにおきさせ給ひて今宵もかくて明けけりと御覽じ、夕べには今日もむなしく暮れぬ。何ぞと出で入る息にあうんを悟り、遂に御髪おろし、明け暮るる

に聖衆の來迎を待ち、ただ安座黙然として供御をたてまつれば、(f) 飯たてまつらざればとて、衰へたまふ事はせねど、藏人の少将、同じく墨染めやつし果て候ひけるが、いとはしげに思ひたてまつるを御覽じて、なにか厭ふ何をか嘆く仮の世はあるに任せてあるぞありよきと、うち誦んじてはおはしける。

(二二丁オ―一八丁オ)

人の身には「三身」が備わっており、それに気付かないのは恥ずかしいことだと「冷泉院」は言う(a)。試みに、「院」が語る仏教思想(a)(b)の言葉を次表のように整理した。^(注1)

三身論		法華經		中論	
応身	具象化した法身	如是相	そのままのすがた	仮(仮諦)	空のままが、あらゆる存在として現れているところ
報身	悟りの境地を知った楽しむ身	如是性	そのままの性質	空(空觀)	世界のあらゆるものは自性や自体がなく、そのまま絶対空であること
法身	如来の真実のすがた	如是体	そのままの自体	中(中道)	空と仮は空即仮であり、仮即空であること

表に挙げた「冷泉院」の言葉は、大きく括れば、大乘仏教をおおもとする天台宗が用いる語を基底にしていると推測される。「冷泉院」は「應報法」の「三身」について、応身は如是相・けたい(解脱の誤写か)であり、報身とは如是性・くうりん(くうかん／空觀の誤写か)、法身とは如是体・中道だという。ここには、「法報應の三身を我が身の上と知」ること、明らかにすることが

如来・上人・悟りにつなると言い、その「本来の面目」「本覺の如来」(三つのものに目覚め、知覚した身)こそが二つとない尊いものなのだと考える「冷泉院」が存在する(c)。

流布本系では、「冷泉院」の開悟は、『法華経』にある長者火宅の喩(資料A)や衣裏繫珠の喩(資料B)を用いて表現された。

げにや(1)人の身に仏の種とてあなるもの、これを見あらはさぬ限りは心の惑ひに世も恥づかし。いつまであさまじうは過ごし果つべき、などとさまかうさまにおほしめぐらしせど、なほかひなくむすほはれて、染むるにしたがふ糸の色までなぞらへられ給ふ。あやかりやすけきをもなほこりずまにとどめて求め給ふにぞ、(2)やうやう本来空のことわり御心の底にみがきあらはし給ふも殊勝なりや。……(中略)……御髮のいただき少し剃りて戒さづけたられしかば、藏人の小将おなじ墨染にやつしてける、いと悲しう見たてまつれば、「(A)燃ゆる火の住処を出で離れて、(B)衣の裏の玉求め得たる事をなん、よろこばしきに、わきて物思ひもなし」との給ふ。(『日本偽書叢刊』第二卷「雲隱六帖」)

【資料A】長者火宅の喩(譬喩品第三)

舍利佛。若國邑聚落。有大長者。……長者見是大火。從四面起。即大驚怖。而作是念。我雖能於。此所燒之門。安隱得出。而諸子等。於火宅內。樂著嬉戲。不覺不知。不驚不怖。火來逼身。……具告諸子。汝等速出。父雖憐愍。善言。誘諭。而諸子等。樂著嬉戲。不肯信受。不驚不畏。了無出心。……而告之言。汝等所可玩好。希有難得。汝若不取。後必憂悔。如是種種。羊車。鹿車。牛車。今在門外。可以遊戲。汝等於此火宅。宜速出來。隨汝所欲。皆當與汝。……競共馳走。爭出火宅。是時長者。見諸子等。安隱得出。

【資料B】衣裏繫珠の喩(五百弟子受記品第八)

譬如有人。至親友家。醉酒而臥。是時親友。行行當官時事。以無價寶珠。繫其衣裏。與之而去。其人醉臥。都不覺知。起已遊行。到於他國。爲衣食故。勤力求索。甚大艱難。若少有所得。便以爲足。於後親友。會遇見之。……以無價寶珠。繫

汝衣裏。今故現在。而汝不知。勤苦憂惱。以求自活。甚爲癡也。汝今可以此寶。貿易所須。常可如意。無所乏短。佛亦如是。爲菩薩時。教化我等。令發一切智心。而尋廢忘。不知不覺。……今者世尊。覺悟我等。作如是言。諸比丘。汝等所得。非究竟滅。我久令汝等。種佛善根。以方便故。示涅槃相。而汝謂爲。實得滅度。世尊。我今乃知。……

(A) で大火にに囲まれた家内に取り残された子どもたちは玩具につられて家から出てくるが、家はこの世を、子どもたちは衆生を、玩具は法華經の教えを比喩する。また (B) では、宝珠は仏性の比喩であり、身に備わっている宝珠に気づいた「有人」は、身の内にある悟りに気づき、開悟する衆生を喩えている。釈迦は『法華經』の中でこの比喩を用い、声聞や阿羅漢でも将来かならず開悟できるのだと説いた。

これと別本系の「冷泉院」開悟の場面を重ね合わせれば、「冷泉院」が、わが身に備わる仏性を自覚することで悟りを開く道筋を与えられたひととして描かれていることは明確となろう。別本系・流布本系に共通するのは、(a)(1)のように、「冷泉院」が悟りの種をわが身のうちに備えているひとであるということだ。それはつまり、その往生・成仏が約束されているに等しい。また、別本系における「三身」という言葉が本来は仏の身の三身即一という語であること、そして(e)(2)のような「空」の思想(『雲隱六帖』を貫く仏教的主題)がうかがえることは、「冷泉院」が中世的解釈によって救われようとしている点で見逃せない。もともと「空」は竜樹の説いた『中論』ほか初期大乘仏教に求められる思想で、とくに『般若心経』が核とするものだが、それは院政期以降に発展した天台本覺思想のなかで注目され、江戸時代初期まで支持されたとい^(注5)う。

ここではまず、「往生・成仏するひと」「救済されるひと」として「冷泉院」が存在していることを押さえておきたい。

2. 『源氏物語』の冷泉院

さて、死を迎えようとしている六帖「巢守」の「冷泉院」を見ると、『源氏物語』における冷泉院の生きかたが、かえって思い

起こされる。先行研究では、その人物像が正編と続編で対照的に描かれていることがよく論じられ、たとえば辻和良氏は、正編の冷泉院を「聖主」と表現し、「聖主冷泉院を演出する光源氏と聖主村上像との接近もかんがみて、物語の冷泉院像は、桐壺帝の「源氏幻想」によって「渾然一体となった光源氏・冷泉院ふたりの関係性」によって形づくられた、「光源氏の王者性が形を成したものであった」という。^(注6)そしてそのいっぽうで、続編の冷泉院はもはや「聖代を現出させたあの冷泉院」ではなく、「好色性」と「政争に勝利した者の、傲慢さ」を持った「全く新しい」人物像に据えなおされているとする。また、同氏は冷泉院が「冷泉院の帝」と呼称されることについて、第三部における「帝」の特長を「登場人物個人としての顔が見えず」「正編のように実質化されてい」ない「空疎な」ものと考察し、「冷泉院の帝」の意味を示唆された。^(注7)正編で光源氏の栄華を支えた「呪具」冷泉院は、後編では聖性を失った好色者である、そのような捉えかたは、多くの先行研究の中では共通しているようだ。

しかし、六帖「巢守」を読むうえでは、『源氏物語』における冷泉院が「罪を負うひと」であったことに注目したい。第一に、冷泉院は「親の宿世の罪」を負って生まれた。

六条院は、おりゐたまひぬる冷泉院の御嗣おはしまさぬを飽かず御心の中に思す。同じ筋なれど、思ひ悩ましき御事なうて過ぐしたまへるばかりに、罪は隠れて、末の世まではえ伝ふまじかりける御宿世、口惜しくさうさうしく思せど、(若菜下④・一六五)

薄雲巻で「ものごとし」を受けた冷泉院は、光源氏を准太政天皇にすることで親への不孝の罪を免れたけれども、子なくして退位する院の運命に、清算することのできない「宿世の罪」を光源氏は感じ取っていた。^(注8)その罪の如何は、次に引用する多屋頼俊氏が最初に提示した。^(注9)

「罪はかくれて」について咲花抄では「源氏密通の事もあらはれず」と解し、爾後の諸註わ多くこれに従っているが、これわ奇怪な解釈であって……この「罪」わ如何なる罪であろうかと考えてみると、これわ疑いもなく、冷泉院が源氏お

父として生れて来られた冷泉院自身の宿世の罪である。冷泉院に御世嗣があれば、源氏お父とせられた宿世の罪も亦末の世に伝わるわけであるが、冷泉院わ一代で終られるから「罪」も亦一代限りで姿お消す、その御宿世お源氏わ一面さうぐしく思うのである。

第二に、続編での冷泉院は、薫という将来有望な男子を寵愛し、玉蔓大君や宇治姉妹などに好色を示す^(まじ)といった、しぶといまでに現世執着する老齡者のすがたを見せた。

帝ほほ笑みたまひて、「さる聖のあたりに生ひ出でて、この世の方ざまはたどしからんと推しはかるるを、をかしことや。うしろめたく思ひ棄てがたく、もてわづらひたまふらんを、もししばしも後れんほどは、譲りやしたまはぬ」
などぞのたまはする。(橋姫⑤・一二九)

冷泉院の「ほほ笑み」は、なお俗体でいる「聖」八の宮と、鄙で負い育った娘たちへの驕りを表しているよう。すでに退位後であるにもかかわらず、冷泉院は未だ「帝」と呼ばれ、都に生きるひととして、彼らと対比される。出家相應の年齢にあつて、なお俗体のままでいる姿は光源氏の踏襲でもあり、院の現世への執着心のあらわれであらう。

さらに冷泉院は、病床の大君を見舞えなかつた薫の事情、つまり薫と大君の悲劇を演出するひととしてあつた。

「心憂く。などか、かくとも告げたまはざりける。院にも内裏にも、あさましく事しげきころにて、日ごろもえ聞こえざりつるおほつかなさ」とて、ありし方に入りたまふ。御枕上近くても聞こえたまへど、御声もなきやうにて、え答へたまはず。(総角⑤・三二六)

「院」「内裏」も八宇治と対立的・対照的に存在するものであらう。思えば、冷泉院は仏道に傾斜する薫を元服させ、年齢

に見合わぬ加階を遂げさせたいに、かれと宇治大君を引き合わせるきっかけにさえなった。冷泉院は、薫をひたすら現し世にひきとどめ、薫の道心を障げたひとであった。そのように見ると、『源氏物語』が第三部の冷泉院に課したのは、「都」や「権力」、「現世」の象徴的人物として物語内を生き続けることではなかったかとさえ思えてくる。

さて、六帖「巢守」において、「我、上なき位にて、犯せる咎あれども、心にはおほへざれども、万の事程々にしたがふ事なれば、民たるもの生けるかぎり作りたるといわんも、まろがやうの者、ただ一ことの犯しといはんも同じ事ぞかし」(d)と云う「冷泉院」は、みずからの罪について自問し、反省するひとである。『源氏物語』においては、倫理や仏道においてさまざまに罪を重ねて生きる冷泉院(注13)がある。

3. 光源氏の子

子孫を残さないことで宿世の罪を隠蔽したかに見えた物語正編から一変して、続編での冷泉院は、女御や玉鬘大君とのあいだに子を儲けた。光源氏による冷泉院の宿世観(前掲若菜下、一六五頁引用)や、冷泉院の御世は一代で終わるがゆえに、宿世の罪もまた一代限りで姿を消すという多屋氏の論(前掲)を見ると、冷泉院の皇子誕生は、その出生の秘密や、院が子孫への皇位継承を主張するための権力を消失していることを予感させよう。皇子に対する、冷泉院の「おりゐたまはぬ世ならましかば、いかにかひあらまし、今は何ごともはえなき世を、いと口惜しとなん思しける」(竹河⑤・一〇四〜一〇五)というつぶやきは、宿世の罪に報いながら生きる彼の生を象徴するかのようだ。その冷泉院が薫を愛育する姿は、次のように語られた。

光隠れたまひにし後、かの御影にたちつぎたまふべき人、そこらの御末々にありがたかりけり。遜位の帝をかけたてまつらんはかたじけなし……(略)……二品の宮の若君は、院の聞こえつけたまへりしままに、冷泉院の帝とりわきて思しか

しづき、……(略)……わざとがましき御あつかひぐさに思されたまへり。故致仕の大臣の女御ときこえし御腹に、女宮ただ一ところおはしけるをなむ限りなくしづきたまふ御ありさまに劣らず、後の宮の御おぼえの年月にまさりたまふけはひにこそは。などかさしも、と見るまでなん。(匂兵部卿⑤・一七―二二)

薫には、伯父に今上帝が、兄に権勢家の夕霧がいる。准太政天皇・光源氏と先々帝の愛娘・女三宮の息子として将来当然政権の中枢につくべき薫にとつて、薫の叔父とはいえ、冷泉院は必ずしも後見として唯一のひとではない。にもかかわらず、光源氏が冷泉院を薫の後見に選んだ理由はなんだったのだろうか。先行研究では、冷泉院と薫の擬似親子的關係は、薫に「出生のまぎれ」というテーマを引き継がせるためであるとか、好色者冷泉院にたいし仏道志向者としての薫の優位性を引き立たせようという物語(作者)の意図の所在としてあると指摘されている。^(注15)

薫を託された冷泉院にとつて、彼を愛育することは、世間的な意味では兄であり義父である光源氏への忠義・孝行を示すことであつたらう。しかし、実は光源氏の実子である冷泉院は、薫を実弟として可愛がることを自制できない。帝位にあるとき、光源氏を実父と知つて准太政天皇の位を下賜したほど、冷泉院は光源氏に敬意を抱いていた。その父から託された薫を、世間が「なかさしも」と見るほどまで過剰に愛する姿は、まるで父親の期待に応えることで愛情を示し、また父からの愛を求め「子」の心の反映であるかのようにだ。そして光源氏は、冷泉院がそのように薫を庇護することを予想していたのではなかつたらうか。

光源氏の期待によつて、冷泉院は、ほんらい光源氏自身が罪の報いとして受け入れなければならぬはずの、薫の親代わりという役目を負つた。しかし光源氏にとつて、実の弟と信じ込んで薫を溺愛する冷泉院の親的な姿は、かつて自らが避けたがつたものではなかつたらうか。薫の五十日の祝いで、光源氏は「この事の心知れる人、女房の中にもあらむかし、知らぬこそねたけれ、をこなりと見るらん、と安からず(柏木④・三三四)」思った。薫を愛する冷泉院は、かつて光源氏が周囲からそう見られていたかもしれないと不満に思つた「をこ」なる姿の再現なのだ。

冷泉院に薫を託す光源氏の行為は、ゆえに非情である。だが光源氏にとつて、親の密通による誕生という宿世の罪を負うふ

たりが築く（親子）関係は、いわば、自らの罪を集約した（場）であろう。薫が生まれたとき、「わが世とともに恐ろしと思ひしことの報いなめり。この世にて、かく思ひかけぬことにむかはりぬれば、後の世の罪も、すこし軽みなむや（柏木③・二九九）」と思つた光源氏が、死を間近に控え、我が罪を見つめなおすための（場）を用意したとしても、さほど不自然ではない。それは死と死後の世界を少しでも心安く迎えんがための光源氏の甘えといえるかもしれない。だが、その甘えは、親子の情愛に深い信頼があつたからこそ発動しえたことであり、光源氏は自らの罪とその贖いを、信頼する我が子・冷泉院に託し、死んでいったのではなかつたらうか。

薫を愛し、かつ、好色な人物像をも押し出す冷泉院は、そのようにして、親・宿世・わが身の（罪）いっさいを引き受けて生きるひとである。続編の冷泉院の存在意義は、単に出生のまぎれをめぐる主題をひきつぐことだけではないだろう。『源氏物語』が冷泉院にあたえた長寿は、彼自身が物語を通してその（罪）を受けとめ、贖うためにある。それは安易な救済や死を与えない『源氏物語』の残酷さでもあろう。そして六帖「巢守」は、そうした光源氏と冷泉院を受けて造形されたのではなかつたか。六帖「雲隠」の次の場面に注目したい。

……大将も中宮も御なげきは尽きせざりける。冷泉院はそのままに起きもあがりたまはず。昔よりの御心むけ、下の心さへ浅からざりしかば、同じ宮仕えにも心の限り尽くし給ひし事、母宮の服のうちには、かの御事は聞きしぞかし。「いかにして御子になしたてまつらんと思ひしを、遂にその本意も遂げずして、かくむなしきさまになり給へるぞ」などと思ひ給ふにも、すべてかたときも世にあらん心地もしたまはず。

たらちねのおやまのすそに入月の影も残らぬあさほらけかな

なをいかにしてか、せめておはする所を見むとも、山とも聞き、あきらめんと御心のいとまなく思ひめかし暮らし給ふに、ある夜の御夢に、山の御門とおぼしき所にうちしほたれて行ひをし給ふに、御かたはらに、いはんかたなきやうに愛敬づきたる女房ありけるを「これやこの忘れがたくしたまふ対の上ならん。げに警策なる人かな」と思ひ給ふほどに、うちおどろき給ひて、名残もいと恋しくて

おもひきやこの世にかくにわかれつつ夢にこころをなぐさめんとは

(中略)

山の院にも、人もおはせず。今は昔の御事もなつかしく、冷泉院にこそ参らめとて、参りて、「しかじかなん」と申しければ、なかなか再びの御心まどひ、申すもおろかなり。「扱も此十年ばかり、まのあたりにおはしけるものを。夢にも知らざりける事」と、ただくれまどはせ給ふ事、言へばさらなり。「さて、今際の時、のたまひおさける言の葉などばかりきや」と尋ねたまへば、ややためらひて申したり。

わくらばに問ふ人あらば吹く風の目にも見えぬあへと答えよ

これをつゐの御言葉とぞ申しける。

(雲隠一〇丁オー一〇丁ウ)

このように、六帖「雲隠」では、「光源氏」が隠棲したことを知った子供たちのことが語られる。そのなかで、「冷泉院」の嘆きに重点が置かれたことにはとくに注目したい。

「たらちね」歌は「光源氏」を比喩する「月影」とともに「たらちね」——「親」を導く歌枕——が詠み込まれ、「光源氏」という「親」を喪失した「冷泉院」の悲しみをあらわす。また「院」が見た、「紫の上」と念仏する「光源氏」の夢は、霊夢であるとともに「院」の「光源氏」にたいする想いの強さを象徴している。古来、夢は神仏の啓示を受けるへ場^{（ま）}であり、現実にはあえないひと・ものへ続く「通い路」であった。^{（ま）}六帖「菓守」には、このように熱烈に「光源氏」を希求する「冷泉院」がいる。

即身成仏を遂げた「光源氏」を偲んで随人たちがむかつた先が、夕霧でも明石中宮でもなく「冷泉院」であったことも、彼が光源氏の第一の後継者であることを強調する六帖作者の態度のあらわれであろう。随人は、「冷泉院」が「光源氏」の実子であることを知っている。「源氏物語」があくまでも拒んだ物語内レベルでの冷泉院の秘密の漏洩、そして語り手が冷泉院を「光源氏の後継者」として扱うことを、『雲隠六帖』は堂々とやってのけた。

その態度は、「菓守」という歌語を詠み込んだ六帖「菓守」の最初の和歌にも見ることがができる。

ものごとの見捨て難きに絆されて我ぞ巢守になりぬべらなる

(巢守 一一丁ウ)

俗世に絆しがあるために出家できないまま生きるわが身を、「冷泉院」は嘆く。「巢守」は、もともとは雛にかえらず巢に残ったままの卵のことを意味するが、『源氏物語』橋姫巻で中の君はみずからをそれに喩えた。『源氏物語』橋姫巻における父・八の宮とその姉妹子大君・中の君の唱和の場面を次に引用する。

春のうらかなる日影に、池の水鳥どもの翼うちかはしつのおのがじし轉る声などを、常ははかなきことと見たまひしかども、つがひ離れぬをうらやましくながめたまひて、君たちに御琴ども教へきこえたまふ。いとをかしげに、小さき御ほどに、とりどり掻き鳴らしたまふ物の音どもあはれにをかしく聞こゆれば、涙を浮けたまひて、

「うち棄ててつがひさりにし水鳥のかりのこの世にたちおくれけん

心づくしなりや」と、目おし拭いたまふ。(中略)

姫君、御硯をやをらひき寄せたまひて、手習のやうに書きませたまふを、「これに書きたまへ。硯には書きつけざなり」とて紙奉りたまへば、恥ぢらひて書きたまふ。

いかでかく巢立ちけるぞと思ふにもうき水鳥のちぎりをぞ知る

よからねど、そのをりはいとあはれなりけり。手は、生ひ先見えて、まだよくもつづけたまはぬほどなり。「若君と書きたまへ」とあれば、いますこし幼げに、久しく書き出でたまへり。

泣く泣くもはねうち着する君なくはわれぞ巢守りになるべかりける

(橋姫⑤・一二三)

北の方と死別した八の宮は、「うち棄てて」歌のなかで、この世にとりのこされたわが身を水鳥になぞらえる。「かりのこの世」は「うち棄ててつがひさりにし水鳥の」という長い序詞を受けて「かりのこ(鴨の卵)」という「いまだ孵化せぬ卵」の意味を掛け持つが、「こ」はさらに「子」の意味をも導き、残されたわが子らの不幸を嘆くころまであらわす。大君はその「か

りのこ」をうけて「いかでかく……」と詠み、「憂き」世に「巢立ちける」わが身の不運を憂えた。その親子の唱和のなかで、中の君が「巢守」を詠むとき、それが意味するのはただ「取り残されるもの」ということだけではない。八の宮がいなければ自分は生い立つことができない、死んでしまうだろう、と詠う。中の君は、父親がなければ死んでしまうほど無力な「子」であり、いのちをかけて父を恋う「子」なのだ。

この中の君詠歌とほぼ同形の下の句を持つ六帖「巢守」の「冷泉院」の歌は、それを引き歌としていると考えてよいだろう。「巢守」の語は、いのちをかけて父を思慕する「冷泉院」を表象する。また、「巢」は俗世を比喩するが、「われぞ巢守になりぬべらなる」と、みずからを推量する「冷泉院」は、むしろその巢から飛立つこと、すなわち俗世を離れることを求めているのではないだろうか。老齡かつ、既にひとの子の親となっている冷泉院が、いまなお親を恋い求めてやまない「子」としてありつづけていることを「巢守」という語は語る。六帖「巢守」はそのようにして、「冷泉院」に光源氏の子であることを主張させ、出家・往生のみちへすすむことを許したのである。

おわりに

六帖作者は、仏道に目覚めることによつて身の内にある仏性に気づくひととして「冷泉院」を造形した。それは、『源氏物語』でさまざまに罪を負った冷泉院に安息の地を与えんがためではなかったろうか。自覚する範囲で罪は作っていないと発言し、光源氏の子であることを積極的に表出する「冷泉院」を描いた六帖作者の態度は、その意味で、『源氏物語』から乖離しようとするものではない。「冷泉院」に救いの手を差し伸べる六帖「巢守」とおして、われわれは、人は簡単には救済されないというこゝとを発信する『源氏物語』のありかたや、またこの物語が「生きること」の困難さをいかように描いてきたかを見ることができよう。六帖「巢守」はあくまで『源氏物語』を見つめている。

ところで、冷泉院という「密通の子」は、たとえそれが皇統の血の乱れにかかわるものであっても、中世の物語読者にとつ

てさほど衝撃的ではなかったらしい。

何事よりも何事よりも、大将（狭衣・筆者注）の、帝になられたること、返す返す見苦しくあさましきことなり。……源氏の、院になりたるだに、さらでもありぬべきことぞかし。されども、それは正しき皇子にておはする上に、冷泉院の位の御時、我が身の御身のありさまを聞きあらはして、ところ置きたてまつりたまふにてあれば、さまでの咎にあるべきにもあらず。

『無名草子』二二三～二二四

さるは藤壺に源氏のかよひて冷泉院をうみ給ふは、まことにあるまじきあやまちにして、源氏は姪然の罪おもしといへども、皇胤のまぎれおもはずなるかたにはあらず、桐壺帝の御為には正しく子也、孫也、神武天皇の御血脈也。伊勢の宗廟その祀をうけ給ひ、天下の蒼生その政をいたゞき奉るべし。それすら、猶冷泉院の御後をすて朱雀の正統にかへせるは、いとさびしき筆にあらずや。……臣下の意にていはゞ、源氏の罪をしらざるまねして、皇胤のおもはぬかたならぬをよろこぶべし。式部が真意をしはかるべし。

安藤為章『紫家七論』元禄十六年^{（注）}

このように、光源氏と冷泉院の親子関係は容認され、皇統の血の乱れは弾劾されない。こうした読者の精神的基盤があったこそ、「冷泉院」はもともと「光源氏の子」らしいすがたを六帖「巢守」において刻むことができたのではないだろうか。実の親である光源氏を捜し求め、悟りと出家に至る展開はまた、中世王朝物語に多く描かれた「親の子探し、子の親探し」という主題の範疇にあるとも言える。

このようにして、罪を背負い、その報いを現世においても受けたと見える冷泉院の、残酷とも言える人生は、みずからの仏性に気づき、また光源氏の子として思い行動することによってあるがままのすがたを刻んだ六帖「巢守」において、救済される。明け暮れに安座黙然として聖衆来迎を夢見る「冷泉院」に、極楽往生への扉は開かれている。

- 1 伝本については、稲賀敬二『源氏物語の研究 成立と伝流〔補訂版〕』（笠間書院、一九八三年）が『源氏物語』の注釈・梗概書に注目し、一条兼良・三条西実隆等による「正統派」の享受資料のなかに『雲隠六帖』がないことを指摘、『源氏物語』の並びの巻などに入れられた散逸物語『桜人』『巢守』との位相差を論じている。また、物語の内容については岡一男「宇治十帖」以後―「山路の露」「すもり」「雲隠六帖」のことなど―（『言語と文芸』1、一九五八年十一月）が、構成・内容について、「今上の東宮が讓位して、匂宮がすぐ帝位にいたり、薫が浮舟を還俗させて三条の上と称し、若君・姫君二方ができるなど言語道断の至り」で、「そのくせ、全体として仏法くさく」「その悟りというのが」「天台の教義を説いたものに過ぎ」ず、「浄土信仰はさらに見え」ないと批判して以降、そうした批判的な論が続いたが、近年刊行されたものでは、三田村雅子（千本英史編『日本古典偽書叢刊第二巻』月報、現代思想社、二〇〇四年八月）が「源氏物語の宇治十帖が、宇治を舞台に遊び、拒絶し、背を向けたはずの権力関係」を「もう一度物語の中に引きずり込むことで、天皇家の物語として源氏物語を再定位しようとし」ているとか、本作品は「権力者の權威の源泉としてのあるべき源氏像をどこまでも追及しようという男性読者の読み」をうけていることを指摘、評価した。だが今西祐一郎、河添房江「座談会『物語の未来へ』」（翰林書房『源氏研究』第10号、二〇〇五年四月）や小川陽子『源氏物語』享受史の研究―付『山路の露』『雲隠六帖』校本』（笠間書院、二〇〇九年三月）がその梗概書の内容を指摘するように、本作品は相変わらず批判的に捉えられる傾向にある。
- 2 『源氏物語』享受史の研究 付『山路の露』『雲隠六帖』校本』（笠間書院、二〇〇九年三月）
- 3 小川陽子（注2同書）でもっとも古く欠損の少ないとされた堀田文庫本「雲かくれ」を、わたくしに改めた。また文中の○付アルファベットは筆者が加えた。
- 4 仏教用語についての考察は、中村元『佛教語大辞典』（東京書籍、一九八〇年二月）、総合仏教大辞典編集委員会編『総合仏教大辞典』（法蔵館、一九八七年十一月）、中村元『空の論理 決定版』（春秋社、一九九四年十月）、玉城康四郎『初期の仏教 八宗綱要』（筑摩書房、一九六八年三月）などを参考にした。ただし、『雲隠六帖』執筆当時の仏教用語の意味は

必ずしも辞書辞典と完全に一致するわけではなく、今後、本作品の仏教用語については考察を深めたい。

5 多田厚隆ほか校注『日本思想体系9 天台本覺論』（岩波書店、一九七三年一月）参考。

6 辻和良「冷泉帝の名称をめぐる―その主題論的解釈―」（『古代文学研究第二次』一〇号、二〇〇一年十月）

7 辻和良「第三部の〈冷泉院〉―「源氏幻想」の行方」（高橋亨編『源氏物語と帝』森話社、二〇〇四年六月）。ほかに、土方洋一「空虚なる主体・冷泉院」（森一郎編『源氏物語作中人物論集』、勉誠社、一九九三年一月）も、冷泉院の非主人公性を論じる。

8 前掲注7・土方論文

9 柳井滋「冷泉院の罪」（『無地』四、一九八四年十二月）は、密通の子には子孫を残さないという論理が光源氏の明石一族に對することは「かの先祖の大臣は、いと賢くあり難き志をつくして、おほやけに仕うまつり給ひける程に、ものの違ひ目ありて、その報に、かく末は無きなり、など人いふめりしを、女子の方につけたれど、かくていと嗣なしといふべきにあらぬも、そこらの行のしるしにこそはあらめ。」によく示されているとする。だが、続編で父親になる冷泉院に對しこの論は矛盾しており、冷泉院の子の誕生する意味については、後述（注10）の多屋論文を支持したい。

10 多屋頼俊「源氏物語お構成する基礎的思想」（『源氏物語の思想』法蔵館、一九五二年四月）

11 玉鬘大君を手に入れ、八の宮の娘たちに興味を見せるがたは、壮年期の光源氏が女三宮という若妻を手に入れることに興味を抱いたことの踏襲とも言える。

12 前掲注7の辻論文には、「帝ほほ笑みたまひて」は、阿闍梨の「古代にめづれば」に對應するものであるが、その笑いの意味は次の「さる聖のあたりを生ひ出でて云々」に尽きる。従って「をかしのことや」は、彼一流の皮肉表現である。……それは同時に、かつての政争の勝者としての発言でもある」とある。

13 重松信弘「源氏物語の仏教思想」（平楽寺書店、一九六七年八月）は、『源氏物語』には（一）愛執の罪、（二）他を悩ます罪、（三）親不孝の罪、（四）子女愛着の罪、（五）仏事を欠く罪、（六）異常死の罪、（七）宿世の罪、があるという。このうち（一）（二）（五）（七）は冷泉院の罪に含まれよう。

- 14 久下康晴「竹河・橋姫巻の表現構造」〔学苑〕五三三、一九八四年五月）で薫が院から離れていく過程と位置づけられるほか、陣野英則「光源氏の物語」としての匂宮三帖」〔学術研究〕四七、一九九九年二月）は、正編の光源氏の栄光の退廃・終焉とし、また高野浩「源氏物語」続編の冷泉院―薫との対比構図―」〔文学・語学〕一八一、二〇〇五年三月）には、源氏の（密通の子には世嗣ぎはできないという）宿世の念が皮肉な形で決着をつけられ、光源氏と冷泉院の問題は解消したとある。前掲注10多屋論文とこの高野論文は内容的に近しく、筆者は両氏の論にいちおう賛同したい。また、冷泉院の出生の秘密は語り手と読者の了解事項であり、あくまでも物語内の人物の共通認識とはなっていないことも断っておきたい。
- 15 前掲注14高野論文。ほか、塩崎真理子「匂宮三帖における冷泉院―薫の恋心をめぐって―」〔駒澤大学大学院国文学論輯〕三五、二〇〇七年三月）など。
- 16 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年五月）には「夢は肉体は残したまま靈魂のみが通っていくものと信じられたらしく、この思考や信仰が恋愛文学の大きな原動力となつており、「古来の日本人の夢の歌の中には、恋人への切迫した思いが募って、夢で恋人との逢瀬がかなうことを願ひ詠む歌が多くあつた」とある。『古今和歌集』藤原敏行詠歌「住の江の岸による波よるさへや夢のかよひぢ人目よくらむ」や「恋ひわびてうちぬるなに行き通ふ夢のただちはうつつならなむ」には「夢の通ひ路」「夢の直路」という表現も見え、それらは夢の中で行き来する路や夢そのものを意味する言葉として使われている。夢に見るのはもちろん恋愛対象の相手ばかりではなく、たとえば『源氏物語』では六条御息所が恋敵の葵上を打擲する場面や、中将の君が入水直前の娘浮舟を夢に見る場面がある。夢は、気に病むほどに思う相手のところへ魂を案内する（場）なのであろう。夢を見た冷泉院は、そういう夢の通い路をおとて山の院で仏道修行をする光源氏を見たのであり、それは光源氏を恋慕う、深い「親恋い」の気持ちがあつたのことと推察できる。
- 17 平重道ほか校注『日本思想大系39近世神道論前期国学』（岩波書店、一九七二年七月）

※本文引用は、とくに断らないかぎり、すべて小学館「新編日本古典文学全集」による。